

小学校一学年の部

☆ 優秀作

「もったいないばあさん」をよんで



おしごまり小学校 一年 おうみ みなと

わたしがこのほんにしたのは、おばあさんがきになったからです。

おばあさんはいつも「もったいない。」「と行ってやってきます。のこしたごはんをたべたり、くちのまわりについたものまでなめてきます。

くちのまわりをなめられるのは、ちょっときもちわるいです。みずのだしっぱなしやなみだまでもったいないといいたいです。

おばあさんはしかるだけでなく、おもちゃをひくったり、いろいろなくぶつものやりかたもおしえてくれます。

このほんをよんで「もったいない。」「といついことが、まだよくわからないけど、やったらだめなことなんだとおもいました。

わたしは、よくみずのだしっぱなしをしてしまいます。じやくちをきちんとしていていないことが、なんどもあります。おかあさんも「もったいないでしょ。」「といいます。

これから、みずのだしっぱなしにきをつけようとおもいます。

だって、おかあさんになるといやだからです。



* じつじょう *

読んで思ったことが素直に書かれています。また実生活でもたいないと聞く場面も思い返しながら振り返っていたのも素晴らしいです。もったいないという意味はまだわからないと書いていますが、何度も本を読み返すとだんだんわかってくると思います。

★ 佳作

「おちきのはらのおへらもの」をよんで



おしごまり小学校 一年 みかみ りんたろう

ほぐがいのほんをよんでいろいろなことわかったよ、おじいのがおとしたハーモニカできつねがたのしやうじょうぶをいいたいです。



★「うしろひまわり」

登場人物たちの気持ちを考えたり、自分が主人公だったらどうするかと想像したり、『読書の楽しさ』を感じながら読んでいたことが伝わってきます。島を新しく作るお話から、「森や林を大事にする」ということや、「うちの大切さ」にまで目を向けられたこと、感心しました。いながらもまたみんな読書をして、新たな気しきも発見をしようとしていたんですね。

★ 佳作

★「ちいさなおうち」を読んで



鷺泊小学校 一年 中山 智晴

いなかだったはずのちいさいおうちのまわりがアパートやちがてきでまじりあわなくなりました。

ぼくが心のこもった場めんはトラックがいなかにちいさいおうちをほんたにおげるところです。なぜならしゃべれないおうちの気もちを考えて、ほんたにおげたからです。ちいさいえは、ま

わりのしせんがこわされていって悲しかったと思います。ぼくも弟にたいせいなものをこわされるとかなしいです。ぼくは、「やめて。」と言えなけれど、ええはしゃべれないので、とてもうらかったと思います。

ぼくは、この本を読んで、あい手の気もちを考えられる人になりたいと思います。まわりのみんなが、よろこぶくねるとうれしいから、じぶんのここのように友だちをたいせいにしたいです。



★「うしろひまわり」

登場人物について、自分の経験や重ねながら感想が書けていました。自分の気持ちをしゃべることができない人は結構います。人の気持ちを大切にしていって、みんなが楽しいと思えるようにがんばっていきましょう。

★ 佳作

★「目の見えない犬ダン」を読んで



鷺泊小学校 一年 佐藤 周育

ぼくが本の中で一ばんすきな人は、坂本さんです。坂本さんは、タンをほして、かえるようにみんなによびかけた人です。あいのこころを思いやる気もちがあるのがすてきだと思いました。

それがよくあらわわってこころのは、タンのこころを作った瞬間、

つないでいたひもがダンの首にからまってしまった場めんです。坂本さんがダンの目が見えないことをわすれていたと後かいし、ダンを心ばいする気もちがすこくつたわってききました。

ぼくは、この本を読んで、目が見えないからといって生き物をすてるなんてひどいと思いました。それは人におきかえても同じです。目が見えないとか、人とちがうからといっていじめてはいけません。目が見えなければ、大へんなことがたくさんあります。だからこそ、ぼくは、こまっている人に会ったり、いじめたりしないで、たすけてあげようと思いました。



じじひょう

考えたじじがはつきりと書かれています。次書くときは、登場人物を自分に重ねて書くともっと感動が伝わってくると思っています。人を助けるってなかなか大変なことだと思います。困っている人を進んで助けるじじができる人になれようと思います。

★ 奨励賞
じゆごごごごごごご

「じじがかえったガラゴ」



利尻小学校 二年 加賀谷 美緒

わたしは、絵を見て、たのしそうだと思ったのでこの本を読みました。

このお話は、ガラゴがみんななかばんをうけています。ガラゴ

がいえにかえることまっている人がつきつきとガラゴのいえにやってきました。そして、こまっている人を自分のいえに入れてたすけるお話です。

ガラゴは、みんなからおすそわけをもらったけど、一人でたべないで、みんなといっしょにたべたりみんなをおふるに入れてあげたりしたのが、心にのこりました。

わたしもみんなをたすけて、元気にさせたいから、ガラゴとおなじように、みんなをおふるに入れたりごはんをたべさせたりしたいです。

この本を読んで、みんなをだいじにしてなかよくすることがいせつだなあと思いました。わたしは、一年生が本をどこにあるかわかんなくて、こまっているときに教えてあげたりけんかをしたときは、すくあやまってなかよくしたりするのよつこつしています。これからもつづけていきます。



じじひょう

本に描かれているいじをしっかりとつひえ、これまで経験と照らし合わせながら、自分の思いや考えを素直に表現できています。今回『じじがかえったガラゴ』から学んだ、「みんなを元気にしたい」「みんなを大事にして仲良くする」という大切なことをぜひまわりのお友達にも広めて、毎日楽しい学校生活を送ってほしいですね。

小学校二年生の部

☆ 優秀作

「うしろの中心」



鷺泊小学校 三年 工藤 佳音
くとう かのん

わたしは、読書感想文の本をさがしに、大すきな本屋さんに出かけました。たく山の本の中から、この本を見つけ、読んでみた
いなと思いました。

この本は、主人公のみずきのお父さんがある日、とつぜん天国へ行ってしまいます。お母さんとお兄さんがまた明るいみずきにもどってほしいとねがって、お父さんのお姉さんがいるアメリカへ行き、色いなるな体けんを通して元気になっていくお話です。

アメリカへ行ったみずきは、森の小学校でべん強をしたり、野さいのしゅうかくくをして毎日をすごしました。お父さんが死んでからみしかったみずきは、毎日なきました。お母さんがお父さんのようぶくをまじめ、ダンボール箱に入れ、奥におしこむのを見た時には、みずきは、わあわあなきました。わたしは一年生の時、大すきだったじいじがなくなりました。声をたくさん出してなきました。今でも、じいじのことが大すきなわたしと、みずきは、よくこにいるなと思いがながら、読みました。

みずきは、ある日、お父さんのことを一度も思い出しませんでした。そういえば、このころかなしみのおすまきは、やってこなくなっていました。みずきは「お父さんのことをわすれてしまったの？」と思いました。それはちがいました。みずきは「わす

れるはずがない。だってお父さんはわたしといっしょに、いつもここにいるのだから。お母さんが夏の間、アメリカのおばさんの家に、あずけてくれたのは、お父さんのことをわすれさせようとしたのではなく、いつのお父さんといっしょだよって思える様になってほしかったのかもしれない。」とタヤけをながめながら、思うのです。

わたしは、この本を読んで、わたしのそばにもきつとじいじがいてくれると思っています。

「じいじは、あの時、こつだったよね。」と、わたしや、わたしの家ぞくとたくさん話します。これからも天国でじいじが心ばいしない様に、わらって、すこついききたいと思えます。

【講評】

自分の経験を思い返しながら、主人公に自分を重ねているのが素晴らしいと思います。また、一貫性を持って書かれているのも良いです。天国に送りたい心配をかけないよう笑顔で過すお父さん、お母さん。

★ 佳作

「アソクサンタとぜんまいねずみ」



利尻小学校 三年 川村 瑛太
かわむら へいた

ほか、この本をえらんだわけはこの本がすきだからです。理由は友だちの大切さがわかるし友じょうもかんじられるからです。

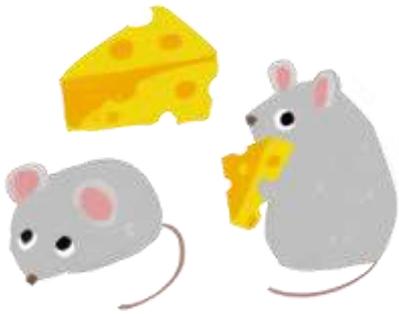
アレクサンダというねずみがぜんまいねずみのウィリーとであ
いながよくなりました。そしてウィリーのもち主にすてられて
かわいそうだったウィリーをたすけるため、アレクサンダはトカ
ゲにウィリーをぶつこのねずみにしてとおねがいました。そし
てぶつこのねずみになって二人でよろこんだというお話です。

ぼくがこの本で一番心に残ったことはアレクサンダはやさし
い子なんだです。自分の願いのことを言わずに友だちをたすけた
らと思わずにすくすく思っています。

もしぼくがねがいごとをかなえてくれると言われたら百万円く
だせらと言います。何でも好きな物が買えるからです。

今のぼくは友だちのことより自分のことを考えてしまいます。
でもアレクサンダのように自分より友だちのことを考えられるや
さしい大人にぼくはなりたいです。

あと、この本の中でたくさんのおもちゃがウィリーといっしょ
にすてられてしまいますがとてもかわいそうだと思います。お
もちゃや物をみんなもともと大切にしたいほづがいいと思います。
ぼくはこの本でアレクサンダのやさしさと友だちの大切さを
学びました。アレクサンダとウィリーがずっとなかよくなつて
ほしいです。



【講評】
U9-C9U1

作品が伝えようとしてくることを素直に受け取り、考えたことを思っ
たことを分かりやすく表現できています。もしも願いを叶えてしまふ
自分は何を願ったんだろう・・・と、感想文を読みながら考えさせら
れまわった。『アレクサンダのように、友達ののことを考えられる大人になりたい』と感
じたその気持ちを持ち続けたいですね。

★ 佳作

「パンケーキのおはなつ」

利尻小学校 三年 牧野 結来
まきの ゆら



あるむらにすべにおなががすく子どもたちが七人いて、おかあ
さんがパンケーキをゆいてくれました。しかしパンケーキは「つ
いでになべからにげてしまおう。」といつてうらがわまでよくゆけ
るにげてしまいました。にげている時に色々な人に出会い、食
べられないようににげてきたけどさらいに会ったばたに食べられ
てしまうお話です。

わたしがこの本を読んでみようと思ったわけは、おもしろそう
だったしどんなお話なのか気になったからです。

パンケーキは、いっしょうけんめい食べられないようにいろん
な人や鳥からにげてきたけどかんだんにばたに食べられてしまっ
たことが心のこりしました。なぜなら「ぼくはいま、くいしんぼ
の七人の子どもとおかあさんとおばあさんからにげてきたばかり。
きみなんかにつかまらないぞ。」といつてたくさんにげてきたのに
ばたのお話にいられてすべに食べられてしまつてかわいそうだと

思ったからです。

もしもわたしがこのお話のしゅじんこうだったらパンケーキはおいしいので子どもたちにおいしく食べてほしいです。でも、食べなくてもただじゃなくへてあげて色んな人に出会うのも楽しそうだと思います。

パンケーキがにげたことで男の人、めんどうり、おんどり、あひる、がちょう、ぶたなど色んな人に出会えて長いたびが出来てパンケーキも楽しかったと思います。

わたしも、パンケーキがにげないようにおいしく食べます。

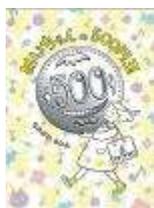


【講評】

本を讀んで、思ったことや感じたことを素直に、自分の言葉で表現してらるうんが良かったです。パンケーキが逃げないようにおいしく食べるのも良いですが、結末もなが感じていたゆえに『色んな人に出会う』のはわかっていても楽しんでいただきたいと思います。人との出会いはもちろんたいていの本でも素敵な場面をみることがあります。

★ 奨励賞

「めいちゃんの五〇〇円」を讀んで



鷺泊小学校 三年 小野寺 心

この本は、めいちゃんがしゃべる五〇〇円玉をひろって、いろいろな使い道をさがすお話です。めいちゃんは、安いおかしをたくさん買うと五〇〇円以上になってしまったり、ペットがほしいと五〇〇円のカメを買おうとする、そだてるためにひつようなエサなども買わないといけないことを知って、五〇〇円の使い道になやんでいました。

わたしもめいちゃんと同じで、ペットをкаいたいけれどその動物を買うだけじゃなく、エサやびょういんなどいろいろなおかねがかかるんだなあと思いました。

めいちゃんはカラスにおそわれている子ねこを見つけ、大切にもっていた五〇〇円玉でカラスをおいはらいました。もしめいちゃんが見つけていなかったら、子ねこは死んじゃっていたかもしれません。それにめいちゃんは、大事にもっていた五〇〇円玉をカラスにむかってなげて、子ねこをだすけてあげたのが偉いと思いました。子ねこはめいちゃんにだすけられてしあわせだと思います。

めいちゃんは、子ねこを家に連れてかえることになりました。わたしもめいちゃんと同じで、ペットをかってみたいと思っていました。でもめいちゃんのお母さんが言っていたように、よぼうちゅうしゃやひつような物をとらえないといけないので、生き物がかうのはかんだんではないとわかりました。ずっとたておせ

きんぐがあります。ほしいだけではだめだと思いました。
もしわたしがしゃべる五〇〇円玉をひろったらおもてんごの
大切にとっておきたいです。



【講評】
うけこむ

主人公と同じ気持ちになって、いろいろなことを考えたりわたりながら、
お話を進め、命や預かっている責任は自分の気持ちだけで考えようというものはな
らぬ。

次に読書感想文を書くときは、最初から途中まで書いていき、最後
のまとめのしなかりを作りたいと思います。

小学校四学年の部

☆ 優秀作

「世界を救うパンの缶詰」



鴛泊小学校 四年 天内 友陽
あまなひ ゆうひ

この本は、あきらめない心が生み出した、「奇跡の缶詰」のお話
です。なんの缶詰かというと、ふわふわなパンの缶詰です。この
パンの缶詰は、じしんやこう水などでこまっている人のために、
開発されました。それだけでなく、世界中のうえで苦しんでいる
人の声も聞いたのが、パンの缶詰を作るきっかけです。始めは、
やき上がったパンをビールびくろに入れ、空気をぬいてみたら、
パンがペチャンコになってしまいました。缶に入れてみると、パ
ンはカビだらけになってしまいました。そのうちに、パン生地を
缶に直接入れて、オーブンでそのままよく方法をみつけました。
その後も実験を百回以上つづけ何度も失敗をくりかえして、つい
に完成しました。秋元さんは色々なかべにぶちあたってもあきら
めなかったから、パンの缶詰がたん生したのです。私は、何でも
あきらめない秋元さんが、すごいかっこいいと思いました。

私はダンスを一番あきらめないでがんばっています。理由は、
たくさん人の前で発表すると、みんながおうえんしてくれるか
らです。けれどかべにぶつかる時もあります。それは、ダンスの
ぶひつけがうまくいかなかった時でした。私は秋元さんと同じように、
うまくいかない時は、何回も練習して、やっつけようというひとな
りました。

また、世界にパンをとどける「球伍鳥プロジェクト」も心にとりました。これはしょうみぎげんの近い缶詰を海外の困っている人にとどけるプロジェクトです。このきっかけは、しょうみぎげんぎれのパンを捨てずにすむ方法はないだろうかという考えからです。秋元さんのお父さんのけんじさんがえがいた「きがちいきの子どもたちを救いたい」というゆめは、むすこの秋元さんにより実げんされました。このプロジェクトもパンのかんづめと同じように、いつもしょんなんをのりこえてじつげんしました。

この本をよんでわかったことは、自分のためじゃなくて、だれかのためにがんばるといふことと、もう一つは、せいこうするに失敗してもあきらめないで、その失敗から、新しいことを発見することです。

私も、秋元さんと同じように、失敗してもせいこうするまであきらめないで、失敗から新しく学んでいきたいと思えます。

【講評】

本に書かれていたこと、筆者が伝えたかったことである『あまのめなご心』の大切さをしっかりと受け止め、自分の生活に置きかえて考えてみる心遣いが良かったです。たぐさんの失敗や挫折、そして何倍もの努力があるからこそ、成功した時の喜びも大きいのですよね。これから自分のため、そして周りの人たちのために、何事もめまらぬまにチャレンジしていきましょう。



★ 佳作

「マリが教えてくれた事」

鷺泊小学校 四年 上野 日向汰



二〇〇四年十月二十三日、マリは三匹の子犬を産んではじめてお母さんになりました。マリはとても幸せでした。

しかしその日の夕方マグニチュード六・八の大地震が起きました。山がくずれ地面にきれつが走りたくさんの家がつぶれました。マリと三匹の子犬たちはなんとか無事でした。でも突然マリは子犬たちをおいてくずれた家の中に飛びこんでいってしまいました。

そこでぼくが一番心に残ったことはマリがおじいさんをさがしに行った場面です。来るたびに新しい傷を作り血をながしながらそれでも何度も何度もやってくるのです。産まれたばかりの子犬がいるのにおじいさんもあきらめない気持ちで勇気をあたえて救ったマリはぼくにとってえいゆうです。ぼくには、そっかんたんにできないことだと思っからです。

十月二十五日、自えたいのへりコプターで全村民がひなんすることが決まりました。持ち出せる荷物は一つだけ、マリは命の恩人だからどうしても連れて行きたいおじいさんはマリを連れていけるように一生けん命お願いしましたがおじいさんの願いはかないませんでした。へりコプターがやってくる時間になって首わをそっとはずした時、ぼくはかわいいそんな気持ちになりました。

迎えが来るまでの十六日間、待ち遠しかったのではないかなあと
思いました。

一度村にもどれることになりもどったら、見まちがいするほど
やせほそったマリがいました。ほくほくしい十六日間を生きぬい
たマリと三匹の子犬はすごいと思いました。

子犬を産んで守り死にかけた命を助けたあきらめない気持ちと
生きる事の大切さをほくは大切だと思います。どうにもならない
事でもあきらめない気持ちで立ち向かえばきっといい事が待って
いるマリは教えてくれました。

またマリと三匹の子犬たちが、もどおりになった山古志村に
もどれる日が来ると思います。



【講評】

十四年前の新潟県中越地震。飼い主を瓦礫の中から救った犬のマリ。
本を読んでいない人にも、被災した飼い主の高藤やマリの勇気ある行動が
伝わる感想文でした。本は、私たちにきえたり想像したります機会を与え

てくれます。読書を通じて気づいたことや学んだこと、ママが教えてくれ
たことを上野くんの今後の生活に生かしてほしいな。

★ 佳作

「ひいおばあちゃんはおじぎょうん ぼくははらげん」を読んで

利尻小学校 四年 尾上 おとめ



この物語に出てくるひいおばあちゃんは何でも知っています。

この本を読んで一番初めに感じたことです。昔、産ばさんをし
ていた九十一さいのひいおばあちゃんは、きおく力がよくて、町
中の人の出産に立ち会っていたそうです。町中でその人たちに会
うたびに生まれたころの話します。

そのひいおばあちゃんとはよくデパートに行かされる主人公の健太
は一緒にいることが恥ずかしいと思っています。店員さんやすれ
違った人に昔の話をして値切ったり、レストランで水だけを飲ん
で帰ったり、ほかの人におせっかいはたらくからです。私も健
太の立場だったら恥ずかしくて一緒にいたくない帰りたいと思
うはずです。

そんな中、健太はデパートで会った同級生の達也に「きもだめ
し」といって万引きをさせられそうになります。ひいおばあちゃ
んは健太と達也を連れて、店員さんたちに二人を紹介していきま
す。最初、私は何でこんなことをするのかわかりませんでした。
けどそれは二人の顔をみんなに覚えてもらい、万引きしにくい
ようにしていたのです。ひいおばあちゃんはすべてを知ったうえ
で、直接怒ったりしませんでした。記憶力がいいだけでなく二人

の性格も知っていて、ひいおばあちゃんにはなんでもお見通しだったみたいです。

私のおばあちゃんたちも私が生まれてからのこと、生まれる前のことをよく知っています。私よりも私のことを知っている人たちがたくさんいるんだなと気づきました。たしかにおしゃべりで外で一緒にいると恥ずかしいこともあって、怒りたくなることもあります。特に、ほかの人に小さいころの私の話をうれしそうに話しているのを見ると、恥ずかしくて泣いちゃいます。

この本を読んで感じたことは、周りにいるおばあちゃんたちから、私の知らない私の話をもっと少し聞いておきたいと思ったことです。ただ町なかで私の話をすると、私は恥ずかしくなってしまうことは知っていてほしいな、と思いました。またおばあちゃんはおかけている間は楽しかったかもしれないけど、イヤな思いをしている人もいますので、私は気をつけようと思いました。



【講評】

Uts-COURT

本の内容と自分の生活を重ね合わせ、自分の思いを素直に表現している感想文でした。また、文字がとても読みやすく、ていねいに取り組んだことが伝わってきました。恥ずかしいかも知れないけれど、ぜひ、自分の

とを自分よりも知っている人たちからたくさん話を聞いてみてください。もっともっと自分のことが好きになるはずですよー

★ 奨励賞

「サッカーボーイズ」

鷺泊小学校 四年 高橋 たかはし うた



みなさんは、サッカーが好きですか、楽しいと思っていますか。私はサッカー少年団に入っています。この本の主人公の遼介君はサッカー筋で、キャプテンもやっています。私も題名を見た時に、このようなお話だろうと思って読みました。ですが、遼介君はキャプテンからおろされてしまいます。遼介君は初めてのざせつを味わい、くやしかったと思います。でも新しいキャプテンになった星川君はすばらしい選手で遼介君も認めていました。

私はこの本を読んで、遼介君と私がにているなと思いました。なぜなら、遼介君のお父さんは高校からサッカーを始めていて、私のお父ちゃんも高校からサッカーを始めたり、家の前で一緒にパスをしてくれるからです。

心に残った場面は「六年生を送る会」で最後にみんなで円陣をくんだ場面です。とくに心に残った言葉は、「エンジョーイー！」「フットボールー！」

です。なぜならとてもかっこいいし、サッカーを楽しんでいること、大好きなことがよく伝わってきたからです。私もこんな言葉をいつか言えればいいなと思いました。

次に、作者が言いたかったとても大切な事を考えてみました。私は『サッカーを楽しむこと』なのかなと思いました。私は大切

だなど思いました。なぜなら、ミスをしてしまった仲間によさしい言葉をかけてあげられるかもしれないと思ったからです。私も練習や試合でむずかしいなあと思うことがあります。仲間と一緒に力を合わせてがんばってほしいと思います。

「エンジョーイー」「フットボール！」

【講評】
ウラ、チヨウ

問いかけから始まっているユニズとして最後の言葉が印象的な感想文です。主人公の遠介くんと同じくらい、うたさんもサッカーが大好きだということが伝わってきました。勝負には勝ち、負けという結果がつきものですが、『楽しむということ』『仲間と一緒に力を合わせることを忘れずに、うたさん、これからもエンジョーイーフットボール！』



小学校五学年の部

☆ 優秀作

「リンカーン〜アメリカを変えた大統領〜」を読んで

鴛泊小学校 五年 渡邊 わたなべ 拓斗 たくと



「リンカーン?」

どんなことをした人なんだろう。名前は知ってても、人物像までは知らないのでもリンカーンについて知りたくなりました。名前は、エイブラハム・リンカーンといい、リンカーンの育った家は、とてもまずしくて、リンカーンは学校にいけませんでした。そのため、文字の読み方や書きや人が平等で、自由であることなどは、お母さんが全て教えてくれたのです。

しかし、リンカーンのお母さんはこの頃はやっていたミルク病というものにかかり、死んでしまったのです。

ぼくは考えました。大切なものを失ったリンカーンの気持ちを。ぼくは、学校にいかせてもらえて、家族もみんな元気に過ごしています。何も不自由ではありません。その不自由のない生活から、もしも家族がいなくなってしまうたら……。とても悲しいです。

前にペットのハムスターが死んでしまった時、悲しくて何にもする気がいかなかったことを思い出しました。でもリンカーンはぼくよりも、もっとつらい気持ちだったと思います。

その後もリンカーンにとってつらい事は続きましたが、大人になったリンカーンは州議員になって、法律の勉強をして弁護士にもなったのです。お金はありませんでしたが、順調に議員生活をおくり、結こんすることもできました。

悲しみのどん底にいたリンカーンが自分の努力だけで成功したのです。とてもすばらしい事です。

一八六〇年、リンカーンはアメリカ第十六代大統領に立候補しました。一番知られていない候補者で、大統領になるのは無理だと思ったそうです。次期大統領がリンカーンに決まったのを読んだ時、ぼくはとり肌が立ちました。

「努力をすれば、夢がかなう」
本当にすごい人です。

そして、奴隷解放宣言をして「人民の、人民による、人民のための政治」というすばらしい言葉を残したのです。

リンカーンは、暗殺され五十六才で死んでしまいました。亡くなってからも、人々は泣きながら祈りをささげるなど、リンカーンが国民から愛されていたことがよくわかりました。それは、リンカーンが国民を愛していたからだと思えました。努力する事の大切さ、人がみんな平等であることを学びました。

自分だったら、船長になるのが夢なので、そのために勉強をしたり人と協力したりして努力を続けていきたいと思えます。



【講評】

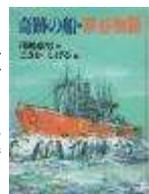
『リンカーン』という、高学年らしい作品を選んでいるところに好感がもてました。また、リンカーンの人生と自分の経験とを照らし合わせて考

えたり、表現の中で倒置法を使っていたりしているところにも感心しました。この本から学んだ『努力する事の大切さ』『努力をすれば夢は叶う』ということを胸に、船長目指して邁進してまいります。

★ 佳作

「奇跡の船・宗谷物語」

鴛泊小学校 五年 西島 一樹



「奇跡の船」と聞かれて、思いつく物は何ですか。ぼくは、昔読んでいた本に、「宗谷の昭和史」という本があります。ぼくは、その時「宗谷」が好きになりました。そして、また新しい宗谷の本をさがして、たどりついた本があります。

みなさんは、「宗谷」という船を知っていますか。宗谷は戦前にソビエトの船として生まれ、貨物船、旧日本海軍特務艦、戦地引き揚げ船、灯台補給船、南極観測船、巡視船と、戦争の中を見事に生きぬき、四十年間働いた船です。

なぜ宗谷は奇跡の船なのか、ぼくは不思議でした。この本を読んでわかった、宗谷の奇跡を、少ししようかいます。

一つ目は、耐氷機能です。「耐氷」とは、氷の中でも、わって進む機能のことです。南極観測船になれたのも、このためだと思えました。耐氷機があるためにできる大きな波で、相手を速い船だと思わせ、見事に敵の魚雷の目をくらませ、よけたという奇跡もあったそうです。また、よっぽど運が強かったのか、太平洋の岩礁に衝突してしまった時に、魚雷が四発飛んできたそうですが、三発がはずれ、一発は不発弾として爆発しなかったなどの幸運もあります。

ぼくがこの本を読んですばらしいなと思った事があります。それは、昔の人の物を大切にしている心です。昭和五十三（一九七八）年に、宗谷は、現役を退きました。その後の宗谷はスクラップ化され、消えてしまうことになっていました。ですが、宗谷の貴重な経歴から考え、スクラップするのはいらないとなり、その結果保存されることになりました。ぼくは、その心に感動しました。

平成二十（二〇〇八）年で進水から七十年を迎える宗谷は、現在も、東京・船の科学館に保存され、誰でも見学することが出来ます。それをこの本で知り、ぼくは実際に宗谷を見学しに行きました。宗谷は、本をふんだんに使った、ぼくにとってはすこしやさしい、とってもエロでやさしい船でした。

この「奇跡の船・宗谷物語」は宗谷の歴史が学べる、ノンフィクションの本です。船の事をあまり知らない人でも、この本を読めば、きっと宗谷も船も好きになると思います。また、宗谷は北海道と、とても縁が深いです。宗谷の名前もそうですし、終戦を室蘭港でむかえたり、現役最後の仕事は稚内港の流氷を割って助けた事などです。北海道百五十周年にちなんで、ぼくは宗谷の本を読みました。また宗谷が好きになった人は、ぜひ東京の宗谷を見に行ってみてください。戦争の中を生きぬき、昔の人のちえと工夫が詰まった、今の宗谷の勇姿を見ることができます。

【講評】

読み手に問いかける文を、感想文の書き出しだけでなく、必読に感じて使うなど工夫が見られました。また奇跡の船についての説明も詳しく書かれていて、本をじっくり読んだことがわかります。東京の『船の科学館』

へ行き、実際に奇跡の船を見学してびっくり、その行動力と探究心にも驚かされました。

小学校六年生の部

☆ 優秀作

「幽霊ランナー」

鷺泊小学校 六年 入井 大輝



「幽霊ランナー」ってどんなランナーなんだろう？
ぼくは、不思議な題名にひかれて、この本を読むことにしました。

主人公の優は三年連続マラソン大会を棄権して、走る姿を見たことがないということから幽霊ランナーと言われてしまっています。その原因は、一度目は転倒、二度目は、おう吐、三度目はとうとうトイレに逃げてしまっただけで走ることができませんでした。ぼくも走ることが得意ではないのできけんしてしまう気持ちは少なからずわかります。またこの本のマラソン大会はチームでのマラソンでもあるので、サッカーチームに入っている自分が足を引っ掛けてせめられたらなんと答えたらいいんだろうと、自分と重ね合わせて考えてしまいました。正直、ぼくならもしかしらこのであきらめるかもしれません。けれど、優は中学生ランナーの指導を受け、グラウンドで正しい走りこみをしたり、毎日学校に走

って通ったりと、前向きにがんばるように変わっていきます。また優のあきらめずに同じことをくり返し、コツコツ続けて努力する姿を見て応援してくれる友達もできます。そのおかげで、マラソンというトラウマを克服していきます。そんな、主人公のつみかさね、応援してくれる友達の気づかい、そして実は「くくなっ」ていた中学生ランナーのおかげで、やっと一位のテープを切るこ

とができたのです。
目標の努力も全て消えてしまふ。何度もあきらめかけてしまつた心もちながら走り続ける優は本当にすごいと思いました。最後まであきらめない気持ちと、走る気持ちが強いから優の前に中学生ランナーが現れたかもしれません。そして、走りたかったけど走れなかった自分の思いを優にたくしたかったのではないかと思いました。

この本を読んで、残り少ない小学校生活、そして先色々な場面が出てくると思うけど、この主人公のように、くじけても何度でも立ちあがっていくように思います。また、優の友達のように、自分の友達がくじけそうになった時、手をさしのべられる人間になりたいです。



【講評】

うみ、ひま

あきらめない心の大切さを自分の経験や体験と重ねながら主人公の強さ・幽霊ランナーの意味を考えられていて素晴らしいです。私たちはしばしば感情面を軽視します。壁がぶつかつたら、ああだめだ、もう無理だ、自分には向いていないんだとすぐ感情がダメになってしまうものです。自分なのにあきらめない心を持つていく方法をこの先考えながら生活してほしいと思います。

★ 佳作

「自閉症の僕が跳びはねる理由」

鷺沼小学校 六年 川端 ひまの かわはた



自閉症の「僕」は、みんなが当たり前に行っている会話や、じっとしていることが難しい。それは自閉症という障害のせいだからだ。だれかに話したいことを考えているうちに頭の中で言葉が消えていってしまう。伝えたいけど伝えられない気持ちは、とても苦しい。「僕」はみんなと少しちがう。

でも少しづつできなかつたことができるようになつていく。
私は、この本を読んで一番心に残つた所があります。それは、どうして上手く会話ができないのか。というところなんです。私は、ふだんからふつとに話したりする事ができます。しかし、自閉症の人はどうして、話したい事と逆の意味の事を言ったり、言葉が出てこない時があるのか不思議に思いました。

私がおも、自閉症に産まれたらと考えたら、話したい事を話せないのは苦しいと思います。話せなくてしゃしゃかったり、寂しいと思います。その事で、他の人と上手くコミュニケーションがとれず、悲しい気持ちもすると思います。

作者が読者に言いたかったことがあると思います。それは人を障害者でも区別しないしてほしいことだと私は思いました。障害があっても、周りの人よりも大変な思いをしていると思います。みんなと同じ社会で生きている人です。なので人を区別してはいけなと思います。

また、私はこの本を読んで思ったことが二つあります。

一つ目は、作者と同じ人を区別してはいけなという二つです。障害者でも、きらいな人でも、人を区別することはダメだと思います。

二つ目は、自閉症の人の気持ちを分かってくれあげることです。話したくても話せない苦しい気持ちを分かってくれあげることが大切だと思います。

この二つが、私の思ったことです。この二つを忘れないようにしていきたいです。



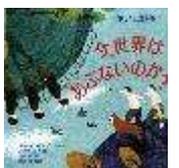
【講評】

作者が述べたかったことや作者の経験と自分を重ねて感想が書かれているのが良いです。「区別をしないで生活したい」「気持ちをわかってくれたい」と自分の考えも書かれています。区別しないで生活することを間違えれば対応がなや過ぎになってしまうと思います。必要な対応と過剰な対応の差に敏感でなくてはいけません。そのためにも、他者を理解しようとするのが大切ですね。

★ 佳作

「今、世界はあぶないのか？」

鷺泊小学校 六年 上田 大地



ぼくが「今世界はあぶないのか」を読んで思ったことは、争いが起る理由は、信じることや習慣を無理やり他の人たちに押しつけることをしたら、争いや暴力を引き起す、ということから、こんなことで争いが起るのだなと思いました。

戦争ってなんだろう。国と国、民族と民族など、ふたつの集団が、それぞれ自分たちの言い分をおすため、どちらかが降参するか敗北するまで殺し合いを続けるのが戦争だと本に書いてありました。殺すほうも、殺されるほうも兵士たちには、自分たちのたいせつな家族がいます。本当はやりたくないのかも知れないし、悲しい思いをする人もいるので、ぼくはかわいそうだと思います。

テロ行為ってなんだろう。自分たちの考えや目的に注意を集めようとして、暴力を使うことをテロ行為という、とありました。人の命のことなど考えず、自分のためだけに暴力をするなんて、テロリストはこわいなと思いました。

争いのなかで起っていることはなんだろう。争いのどちら側の人も、戦争やテロ攻撃で傷つけられたり殺されたりすることがあります。戦うの間には家や持ち物をこわされ、働く場所や祈る場所、学ぶ場所を焼かれて失うこともありますから、難民がすごく多いのだと思いました。

僕がこの本から学んだことは、私たちが安全に過ごせるのはルールがあるからということです。学校では人を傷つけない、いじめられたりするのを防ぐためにいろいろなルールが決められてい

ます。ですから戦争でのルールを守らない国があれば、その国との貿易を中止することもあるのだなと思いました。作者のいいところはルールをしっかり守れば戦争はおきないということだとほへほと思いました。



【講評】

高学年らしいテーマの作品を選んでいるところに好感が持てます。平和なのはルールがあるからなのかもしねないと作者の言いたいことの答えを自分なりに考え、述べているところが素晴らしいです。新しい発見や今後の生活でどうしていきたいかということも書かれていてとても良かったと思います。

★ 奨励賞

「絵の中から SOS!」を読んで



利尻小学校 六年 富岡 小華
とみおか こはる

この物語は、いっこという女の子が人魚の絵をかき、それに弟達がいたずらで、かいぞくや宝箱をかきこんでしまうと、絵にすいこまれ、そこで人魚達を救うために仲間たちと伝説の「海の守り手」を探す旅をするという物語です。

この本を読んで心にのこったことは、人魚のツイーが、困っているイルカを助けようとしたやさしさです。ツイーは、かいぞくたちに網にかかったイルカをわなにされ、つかまってしまいました。それでも、ツイーは、沖にかいぞくがいるのにもかかわらず、まっさきにイルカのもとへ行ったのです。私も、ツイーのようにまっ

さきに、だれかを助けに行きたいです。なぜなら、助けを求めて、声をあげている人がいるのに、ほうっておくことは、できないからです。

もしも私がお話の主人だったら、いっこのように、人魚を救うための、ぼうけんをひきつけて、人魚を助けに行きたいと思っています。いっこの、ツイーのお姉ちゃんのキーやその他の人魚たちを助けるためにかいぞくのところまで、ぼうけんをしに行きました。私は、だれかを助けるために新たなぼうけんをするということとは、したことがないので、いっことはすごいなと思いました。いっことは、たくさんぼうけんをし、やっとかいぞく船へ入ることができたのです。私なら、つかれきってしまい、歩くこともできなくなりそうです。でも、この本を読んで、いっこのがんばっているすがたが思いうかび、私もこれからいろんなことをがんばろうと思えました。

この本を読んで大切だなと思ったことはツイーの場合は、イルカを、いっこの場合だとツイーたちを助けようとするやさしい気持ちです。本当にいっことは、やさしい子だと思います。いっことは、たくさん動物や人魚と仲良くなっていて、すごく積極的な子でもあると思いました。

私もいっこのように積極的にやさしい自分になりたいと思っています。なので、この目標を達成するために、これからも前を回いて進んで行きたいと思っています。



書き出し部分の本の要約が、とてもわかりやすくてめられました。読書を通して、ドキドキ・ワクワク・ハラハラという冒険気分が味わえたことが伝わってきました。主人公と自分を対比して「私もこうなりたい」という理想の自分像を見出せているところも、六年生らしい素敵な感想文だと感じました。理想の自分に近付くために、一歩ずつ前進していつかへだといね。

中学校の部

☆ 優秀作

「物語のおわり」



鬼脇中学校 二年 西澤 輝人

この世界に、夢を叶えられた人は何人いるんだろう。いつの時代も、夢を持っている人は多くいる。しかし、夢を仕方なく手放してしまう人も少なくない。

その人たちは、夢にどう区切りをつけるのか。

湊かなえさんが書いた『物語のおわり』を読んだ僕はそんなことを考えるようになった。

僕にとって夢とは、数ある幸せへの答えの一つである。夢を通じたいは、僕にとっても素晴らしいことだ。しかし、現実はその甘くない。僕はこの「この将来の夢」というのはないが、人を笑顔にするというは好きだ。そして夢をあげるとするならば、エンターテイナー的なものだろう。

しかし、夢をもてたとしても、必ず叶うとは限らない。ともしや僕は将来どうやって夢に区切りをつけるのだろうか。

夢を手放さざるを得なくなる理由は幾多もあるだろう。たとえば、才能がなかったり、努力が実を結ばなかったりして生きるために夢をあきらめる者も多い。また、大切な物を守るために夢を手放す者もいるかもしれない。金を選んで夢を手放すか、夢のために金を捨てるかなど、選択をしなければならなかった者も少なくないかもしれない。『物語のおわり』という本は、夢に関する悩みを持つ者について描いた物語だ。

『物語のおわり』は「空の彼方」という未完の小説を中心に、それぞれ悩みを抱えた五人が悩みに向きあっていくお話だ。五人の悩みはそれぞれで、先程言っていたように苛酷な選択をしなければいけない者、夢をあきらめざるを得ない者もいたりする。「空の彼方」は外に憧れを持った少女が小説家という夢か、彼氏と結婚するまで迷い、結局小説家を目指して夜中に駅へ行くも、そこには彼氏がいる…という場面で終わっている。

小説「空の彼方」を読んだ五人の登場人物は、その物語の続きを想像する。五人が出した結論はそれぞれ全く違うものであった。結末は人それぞれ違う。つまり、夢への区切り方は人それぞれで、一つではないことを示しているように思えた。人生で後悔しようとしなかつと、自分らしい答えで選べば、これから先のことに前向きに取り組むことができるとは思えないだろうか。僕には「空の彼方」という小説が人を変えさせる力があるとは思えない。ただ、この小説の状況を客観的に見る事で、自分にとって何が一番が見えてくるのではないだろうか。夢に区切りのつけるにしても、自分が納得できるなら、多少後悔しても、少なうとも何かを得られるはずだと僕は想う。

僕がこの先夢に区切りをつけても、きっとまたやりたい事をやり始めるであろう。できないにしても、その選択が正しくなくとも、僕は自信をもって選んだ道を歩きたい。



【講評】

「夢」が自分にとって大切であれば大切であるはず、「夢」区切りをつけると「夢」は難しいものです。「空の彼方」という未完の小説を中心に、それぞれがもつ「夢」がキーワードの悩みを向き合っていく物語を通して、「自分だったらどう思う」という輝人くんの考えがしっかりとまとめられていて感心しました。中学生の皆さんの未来はまだまだ未知数です。「自分らしさ」を大切に、夢に向かって前向きに進んでいくことを。

★ 優秀作

「あなたの夢はなんですか？ 私の夢は



大人になるまで生きていきたいと思います。」を読んで

鷺泊中学校 二年 高橋 優羽

この本はアジアの貧困地域に暮らす人々の生活そのものが描かれている実話の一冊です。この著者はアジアを中心に貧困に苦しむ子供達の支援をしている偉大な人物です。

この本は色々な子供達が出てきました。中でも私の印象的だった子供は、「ゴミを拾いながら生活している四歳の女の子のお話でした。

女の子は毎日、「ゴミ捨て場」を訪ね、「ゴミ」をお金にかえています。母と二人暮らしですが、母親がいくら働いても人間一人が食べる分さえも稼げることができないそうです。なので、「この少女が生きようと思ったら、自分で働くしかないのです。本には実際の写真が記載されています。子供達には靴が買えないため、裸足の生活をしています。そのため、裸足で「ゴミ」の中に入っていくのでガラスや鉄くずで足を切ってしまう、そこか

ら菌が入り、感染症などの病気で死んでしまうのです。この少女も同様、亡くなってしまいました。

一方、私達の生活はどうでしょう。物があふれ、食べ物も粗末に扱い、ありがたみ知らず生きている子供達も多いのではないのでしょうか。私の近くでもそういう話をよく聞きます。おもしろくないから捨てる、物を壊すなどと、沢山います。私も物を沢山もっていますが、この暮らして当たり前になっていました。もう一方には、一度もお腹いっぱい食べたことがなく、いつも死と隣り合わせで生きていることをこの本に出会って知ることができました。歴史や文化の違いもありますが、私達の暮らしが豊かであることが窺えます。そんな中、懸命に生きることが、どんなに苦しくても笑顔で生きている貧困国の子供に尊敬の気持ちと、素直でたくましく、とても格好いいと思いました。

この本に出会って、いかに私達が贅沢な暮らしをしているのが、よく分かりました。ポロポロになりながらも懸命に生きている子供達を私は心から尊敬しました。同時に自分も同じように、命を大切に生きていこうと思います。

私は将来、支援活動のようなボランティアに参加できたらなと思っています。今はまだ可能ではないとおもいますが、自分自身が真剣に、懸命に生きることが貧困国の人々を通して世界中へ最高のボランティアになると、この本を読み、気づかされました。これから、その心を忘れず生きていきたいと思えます。

私はこの本を沢山の子供に読んでもらいたいです。私と同様に、生きることの大切さを改めて気づくことができます。ぜひ、この本を読んでみてください。

【講評】

今、あなたが「ここに存在している」という事実をどう捉えているか、誰かに言われても「そんなのわかっている」といって聞き流してしまいがち。

だからこそ私たちは、そんな思考を打ち砕く、「圧倒的な現実」と出会う
必要があります。この本には、そんな「圧倒的な現実」が詰まっています。
現実を受け止め、自分なりに消化し、未来の自分へと繋ぎようとしていく
ことが、良く伝わってほしい文章でした。良し本に出会えましたね。

★ 佳作

「ツナグ」

鬼脇中学校 二年 箕輪 萌華



「亡くなった人に一度だけ会うことができる。」と言われたら、あなたは誰に会いたいですか。この物語は、さまざまな想いを抱えた人達が、死者との再会を果たし涙する物語です。

死者と生者を繋ぐ力をもっている使者「ツナグ」。しかし会えるのは一度きりで、使者の方から依頼を待つことしかできないのです。再会は一度きりなので、本当にその人に会うかどうか考えなくてはなりません。

この物語の中で一番印象深いのは「後悔」です。なぜあの時伝えられなかったのか、謝れなかったのか、言いだせなかったのか。私は読み進めると、まるで自分の事のように悔しさがこみあげてきました。誰かとの永遠の別れを迎えたとき、自分は「後悔はない」と言いきれないでしょうか。きっと心のどこかで「あの時…」と後悔してしまっていると思います。

もしツナグがいたら、私は「大祖母」に会いたいと依頼します。私は今年大祖母を亡くしました。亡くなった報告を受けた時は驚きと悲しみでいっぱいでした。時間が経つにつれ色々な後悔が頭をよぎるのです。

あの時また会いにくるねと約束した事。たくさん電話で話そうね、と言った事。今思えばあの会話が最後でした。だからこそもう一度会ってたくさんお話ししたいです。

「別れ」それは容赦なく突然訪れてきます。その時まで「どれだけのことを伝えられるのでしょうか。」

現実の世界には、ツナグという存在はいません。なので「亡くなったら」

「あの時こうすれば、あの時後回しにしなければ」

と後悔しても、もう二度と会うことはできないのです。人はいつか死を迎えます。友達や両親、大切な人など、いつ離ればなれになるかは分かりません。私は後悔しないように、伝えることはすべて伝え、「ありがとう」「ごめんね」を素直に言える毎日を過ごしていきたいです。

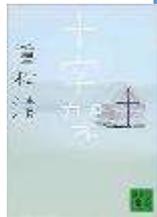


【講評】

大切な人との「別れ」がいつ訪れるのか。それは誰もが予想できないことです。だからこそ、突然その時が訪れた時に「後悔」することも多いのだと思います。「ツナグ」に出てくる使者は現実にはいません。だからこそ、両親や友だち、周囲の人へ気持ちを伝えることがいかに大切なのか、この作品を読んで考えたことがよく伝わってきました。「ツナグ」を通して感じた思いを、これからも大切にしてくださいね。

★ 佳作

「十字架」



鬼脇中学校 二年 小野寺 百花

「いじめ」と言う言葉を聞いて何を思い浮かべるか。私は、暗闇の中に光も入らず前も後ろも何も見えない孤独のようなものと答えるだろう。「いじめ」という言葉は私が幼い頃からずっとTVなどから聞こえてくる言葉だがあたりまえのように聞こえてくるその言葉はもっとずっと昔からあったものなのだろう。あなたはこれまで十五年間生きてきて、「いじめ」というものに出会ったことはあったか。もしそのように質問されたら「いじめ」「いじめ」そう答えるだろう。だが気にしていないだけかもしれない。

私がそう思うようになったのは、「十字架」という本を読んだからだ。この本は、いじめを苦に自殺したクラスメイトが残した遺書に全然関わりのもなかったのに「親友」と書かれた主人公が以前は、クラスメイトがいじめられているのを黙って見ていただけだったのに、成長するにつれてクラスメイトの思いを少しずつ理解していくという話だ。

私がこの本の中で一番注目したいのはクラスメイトが弱く、抵抗しないからいじめられキャラのようにあつかわれ周りがそのことを大して気にしていなかったことだ。「キャラ」という固定観念から、その言葉に閉じこめられ、クラスメイトのいじめが悪化したのだと私は思う。

そもそもキャラとは何か。キャラとは自分一人で決めるものでも他人が決めるものでもないという考えが浸透しているためか、雰囲気で定まってしまうのかもしれない。あの子はあいつ子だから大丈夫とか周りが言うことによってその人の自由や行動が少しずつ制限されていってしまうのではないだろうか。つまり私が言いたいのは周りにイジメがないと思ってもキャラに閉じ込められてしまう人がいるように、周りが決めてしまったイメージが相手のことを少しずつ追い込んでいく可能性があるということだ。それも一種のいじめになってしまっているのではない。いじめにもたくさん種類があるが、私達がずっと言われている「相手」が嫌だと思ったらいじめ」という言葉は正しいと思う。嫌な事をしたらいじめなら何人も人にできないではないかと思ってしまうことも確かにあるが、この言葉が伝えたいのはきつとささいなことだからいじめに発展してしまうかもしれないから人を気づかうことを忘れないようにするという意味だと思っ。

だから私は、今まで通りの対応を人にするのではなく小さなことでも相手のことを考え気付かないいじめも気付いていないフリをするいじめも周りがなくなくなるまでいじめてきた。



【講評】

「いじりられキャラ」という固定観念から、「いじめ」が始まり悪化してしまふことは、現代の社会で大きな問題となっております。周りが勝手に決めつけたイメージがつきまとい、払拭するにも難しく、そのイメージが徐々にその人自身を追い込んでいく…。日常にひそむ「いじめ」の影に一人でも多くの人が気づき、自分の言動を見直し、相手のことを考えられるような社会になってほしい、という強い思いが伝わってきました。

★ 佳作

「この本から学んだこと」

鷺泊中学校 三年 三上 桜乃



私は、この本を読み、人との関わり方を改めて考えようと思いました。いつ、自分の周りから、大切な人が消えるかわからない。私が読んだ「コーヒーが冷めないうち」 という本は、東京にある小さなカフェの「過去に戻る」という不思議なつわさから、四人の女性たちが紡ぐ、家族と・愛と・後悔の物語です。

「過去に戻る」というつわさのあるカフェ・フニクリフニクラ。確かに過去に戻るということは事実ですが、それには、たくさんのルールがあり、ある程度のお客さんはルールを聞いた時点で帰ってしまうのです。

私は、過去に戻りたい、つまり、後悔している気持ちが強いお客さんは、ルールを聞いたとしても帰らないと思います。ですが、そこには、「このカフェに訪れたことのない人とは会えない」、「過去に戻るのには、コーヒーを注いでから、その「コーヒーが覚めてしまふまで」というルールが

あります。そんなめんどくさいルールがありながら、それでも過去に戻ろうとする、四人の女性。

私が一番心に残った物語は、『親子』です。このカフェで働く妊婦のお話です。心臓が生まれつき弱く、もし、子どもを産むとしたら、母子共には助からない、と医師に告げられる、という話です。その妊婦さんは「産む」という決断をします。私がもし同じ立場だったら、自分が子どもを産んだあとに、死んでしまったら、子どもが何て思うか、不安になり、産めないと思います。でも、せつかく宿った命なのに、中絶してしまふのがこわい、という思いもあります。きっと旦那さんも、心配したでしょう。きっと、色んなことを考えながら、一人で悩みに悩み、かっとうした結果がこの決断だと、私は思っています。普段、明るく元気な人が、裏では、一人で静かに、誰にも相談せず、悩みこんでいる。さみしいような、悲しいような、あいまいなこの感じが、この物語の雰囲気をつくっているんだと思います。最終的に、この人は、あの席に座って、三人とは違う「未来」にいきます。他の人が、考えていないような、不思議なことを一人で考えている人だと思いました。未来に行ったあと、自分がうんだ子どもに会い、泣いて現実に戻ってくるシーンは涙が止まりませんでした。

「コーヒーが冷めてしまふまで」という、短い時間。このルールがないと、この物語はきつと成り立ちません。他の本にも、たくさんのルールがあるなかで、「わたしは、このルールが一番魅力的だと思います。もし、これがいつまでもOK、というルールだったら、この物語の何ともしえない感じがなくなってしまう。」「コーヒーが冷めないうちに」これは、ひどく、冷たいルールのように、人をひきつけるものかもしれない。もし、私が主人公だったら、過去にいけるか、楽しみです。





【講評】

この感想文を読んで、続きが気になり急いでAmazonで注文しました。物語の面白い部分を的確にとらえ、それを描写し、かつ読み手に魅力を伝えるように書く…という点は、並大抵のようではできませんが、この感想文は、それに成功しているように思いました。

★ 奨励賞

「バースデーカード」



鬼脇中学校 三年 七戸 岳

皆さんは身近な人の死について考えたことはありませんか。

「バースデーカード」の主人公、鈴木紀子は、引っ込み思案で人付き合いが苦手な小学三年生です。ある日、主人公の母、芳恵が突然病に倒れてしまふ。芳恵は余命宣告を受けながらも、紀子の十才の誕生日に家族でピクニックに出かけます。そこで、毎年誕生日にバースデーカードを贈ると子ども達に約束します。そして約束通り、二十才になるまで一年に一度天国の母からメッセージが届く。そんなお話です。

僕がこの本を通して感じた事は、親のすこさです。

優しく明くるて、大好きだったお母さんを亡くしてしまい、紀子はきつと辛く悲しかったと思います。そんな紀子を悲しませないように、母はバースデーカードを書いたんだと思います。カードには、紀子が良い人生を送れるようなボランティアに行きなさい。などのアドバイスが書かれています。「頑張って」と紀子に伝えている様子が目に浮かぶ

ようなとてもお母さんらしいバースデーカードでした。僕はこの気持ちを感じて、改めて親はすこいなあと思いました。

親はいつも子どものために色々な事をしてくれるし、自分の事より子どもの事を第一に考えてくれます。それなのに僕は親の言うことに対して、言い返したり、自分のために言ってくれていると分かったりながらも無視してたりしました。もしも僕の母が入院してしまつたら、今まで母がしてくれた、毎日のごはんを作つたりその後片付け、洗濯、家の掃除は自分達でしなくてはなりません。そして何より自分をしかつてくれる人がいなくなつてしまいます。この本を読んで親の大切さが分かり、僕たちを大切にしてくれていることが分かりました。

僕はこれから親にぶつかることがあると思います。でも、親に対する感謝を忘れずに親に頼ったり逆に頼られたいと思いました。これからも家族や皆のことを大切にしていきたいです。



【講評】

お母さんの思いが詰りもった「バースデーカード」。心が温まるような話だということが、感想文から伝わってきました。家族と同じ屋根の下で生活している、そのありがたみや感謝の気持ちをつい忘れがちになってしまいます。「バースデーカード」という作品を読み、主人公を自身に置き換えることで、その大切さに改めて気付くことができましたね。ぜひ、今後も家族のことを大切にしながら生活を送ってほしいと思います。

★ 奨励賞

「バースデーカードの大切ね」



鷺沼中学校 三年 山本 彩心

「あすかなんて、本当に生まなきゃよかったなあ。」あすかの十一回目の誕生日に母親が言った言葉でした。この、あすかの存在をすべて否定してしまうような言葉に、とても胸が締め付けられました。さらに、あすかはそれ以上の苦しみを受けていると思うと、悲しい気持ちがより強くなりました。そして、母親に加えて、兄の直人までも「お前、生まれなくてなきゃよかったな」と、あすかに言ったのです。誕生日なのに誰にも祝ってもらえず、残酷な対応をされたあすかはその日、声が出せなくなってしまうました。私は改めて、言葉の重みを感じました。心にすっしりと残るひどい言葉はあすかを深い悲しみに追いやっていったのです。言葉は、ときによつては人を幸せにすることもできます。ですが、人を傷つける刃物にもなりかねません。あすかは心を、言葉という刃物で傷つけられ、深い傷を負ってしまったのです。

その後、直人は、あすかが高熱を出したことをきっかけに、今まで自分があすかにしてきたことを反省します。そして、あすかはその日、直人に必死に口を動かして伝えました。「生まれて、こなきゃよかった」と。私は、涙が溢れてきました。それを言わせてしまうその環境がとても悲しく感じました。「相手の気持ちを考える」ということは、当たり前のように、できていない人が多い気がします。直人もその一人だったのでないでしょうか。特に今の世の中はいじめなどの問題で、相手の気持ちを考えるだけでも解決に近づくことがたくさんあると思います。たくさんの方がそれを意識できるようになってほしいです。

そして、あすかは、声を取り戻すため、心を休めるために祖父母の家へ行きます。祖父母はとても優しく、あすかの心を癒しました。私は、この場面で人の温かさを改めて知ることができました。冷たく酷い対応を受けてきたあすかは、より人の温かさを実感することができたと思います。私は、ホッとしました。あすかを支えてくれて、気持ちを受け止めてくれる存在ができたからです。そして何よりも、祖父母があすかのために涙を流せるということがとても素敵なことだと思いました。それは相手の立場となって物事を考えることができたからこそのことなのです。そして、無事に声を取り戻せた時には、心からよかったと思うことができました。声を取り戻せたあすかは、変わりました。新しい学校でのいじめに立ち向かい、母親ともしっかりと向き合おう、とても強へ、優しい子になりました。人はこんなにも変わる事ができるということを学ぶことができました。

私は、この本の中であすかが成長するのことも、たくさんこのことを学びました。その中でも、一番たくさんの人に伝わって欲しいと思ったことがあります。それは、「人は支え合って生かしている」ということです。あすかを祖父母が支えてくれたように、あすかがいじめに立ち向かい、助けたように、誰かを支え、誰かが支えてくれる。そんな素敵な関係な

のだと思います。だから私は、あすかや祖父父母のように誰かを支えてあげられるくらい、強く、優しくなりたいです。

【講評】

表現力が高く、読書感想文で何を書けばよいのかを十分に理解していることが伝わってくる文章でした。「言葉は、ときによっては人を幸せにすることもできます。ですが、人を傷つける刃物にもなりかねません」という言葉、とても胸に響きました。



★ 奨励賞

「Another」を読んで



鷺沼中学校 一年 寺田 ひよの

Anotherを読んで私は、大きく分けて二つの事が分かりました。一つ目は、仲間はずれという事についてです。作品の中で、一人の女の子をいえないようなもの、つまり、仲間はずれみたいなものにして、クラスの悪い事をなくす事をしていました。ですが、それでもクラスの皆はおびえていて、私は、一人を仲間はずれにしてまで、悪い事をふせいでいるのにおびえていたら、意味がないと思いました。私たちの日常生活でも同じだと思います。クラスの中の一人を仲間はずれにしても、罪悪感で皆暗い表情になると思います。一つ一つ事から私はこの本を読んで、仲間はずれは悪い事だし、やっても意味がないな、と思いました。二つ目は、ただ何かにおびえたり、こわがったりしているだけでは何とできない事です。この作品では、クラスの人がクラスでおこる悪い事におびえたままで、ただ一人を仲間はずれにしたただけでした。私は、そ

れでは仲間はずれにされた一人の子に責任をおしつけているようでした。そこから、真相を見つけようとする主人公が出てきて、一回は仲間はずれにされるものの、意味がない事がわかったとなると、友達も手伝ってくれたりして、みごと真相を知る事ができました。このことから、何か行動しないと、思っている所には一歩も近づけない、こわがっていたり、おびえたりしているだけでは、何もできない事がこの本を通してわかりました。

三つ目は、的確ではない事の思いこみについてです。この作品は、昔に火災で亡くなってしまった人気者の男の子がいて、それを受け入れなかったクラスの人たちは、その男の子を生きているという事にしました。つまり思いこみを強세의にしました。それによって、その学校の三年三組に悪い事がおこるようになってしまいました。日常でも同じだと思います。思いこみによって人間関係がわるくなる事もあります。なので、私はこの本を読んで、本当ではない事を思いこむと、後に悪い事がおこると思いました。

私は、この本を読んで他にも、最後の真相にも驚いたりしましたし、自分も真相について途中見つかる昔の手がかりを使って考えることもできました。この本を読んだきっかけは、この本の作者さんが好きで、本屋さんで買ったのですが、読んでみると、色々どんでんがえして、とてもおもしろかったです。主人公の気持ちにも共感できる所もありましたし、私ならどう行動するのになあと本の世界に入りこめるような作品でした。

【講評】

自分が感じたことを、ありのままに素直に書いたことが伝わってくる気持ちのよい文章でした。伝えたいことの中心が何かを決め、それを軸に文章を展開すると、さらに素敵な文章になると思います。今後ご期待します。

